



2021年千正寺カレンダー 12月の言葉



念仏は仏の慈悲が  
届いている証し

毎朝、小学3年の次女は起きると布団の中から必ず「お母さん、お母さん」と台所で朝食準備をしている妻に来て欲しいとせがみます。その声を聞くと「お父さんもいるのになあ」と、少し妻に嫉妬します。上の子ども達も学校から帰ってくると「お母さん」「お母さん」と妻ばかりに話しかけます。たまに「お父さん」と言ってきても「お父さん、お母さんは？」と。我が家では父親の存在はかなり薄いのです。

以前、布教使先生に聞かせて頂いた話に、小さい子どもが「お母さん」と呼ぶようになるには、それまでに母親が我が子に向かって「お母さんよ」「お母さんよ」と何千何万回も呼び続けた母親の愛情の末に、我が子の口を通し「お母さん」と呼ばしめているのです。子どもが自分の力で「お母さん」と言っても、そう言わせたのは母親の「お母さんよ」の呼びかけがあったからです。

私たちが称える「南無阿弥陀仏」のお念仏も同じであって、阿弥陀様の「必ず救いとり、仏に生まれさせずにはおかない」という、私たちを見捨てることのないお慈悲のお心が至り届いているからこそ、お念仏申すことが出来るのですと教えて下さいました。

親鸞聖人は、お念仏は阿弥陀様が私たちを呼んでくださる「よび声」だと教えて下さっています。「必ず救う。我にまかせよ。」という阿弥陀様のよび声がお念仏なのだ。

そのことを綴った歌があります。

我れ称へ 我れ聞くなれど  
南無阿弥陀 つれてゆくぞの 弥陀のよび声

(原口針水和上)

私が称え、私の耳に届く「南無阿弥陀仏」の声はそのままに、「必ず救う。我にまかせよ」という阿弥陀様のよび声となり私の耳に届いてきます。

阿弥陀様のお慈悲のよび声が。私たちが称えるお念仏でありました。

(文：鹿谷賢純法務員)